

躓き転び また起き上がる

あなたの愛が あればこそ

リーベ

日の目見れないふたりの仲は
せめてなりたや 影の杖

ゆうほ



死ぬまでおまえ 片腕貸せよ
閨の枕は 俺が貸す

リーベ

貸した枕で見る夢誰よ
いっそはそはそか 憎い人

ゆうほ



用じた心に
春風そよぎ
顔をのぞかす
恋暦

ゆうほ



お前待つ間に
煙草を吸えば
灰と恋とが
ポトリ落つ
ゆうほ



格子女に

つい乗せられて

のぼりや極楽

清みや

地獄

ゆうほ



夫婦喧嘩も

喉元過ぎりや

すぐに臍下

また喧嘩

ゆうほ



あなた会えると
いそいそ出かけ
あえばつれない
素振りする

ゆうほ



胸のなかいる
不安が顔を
信じるだけが
できる事

ゆうほ



出来りや替えたい

置と妻が

出来りや捨てたい

亭主だと

ゆうほ



男を
口説かせる
口説かせる
上手
いっの
間にやら
佐かさされる

ゆうほ



人目忍んで 咲かせる花に
名前つけましょ

「涙花」

月うさ

離れ離れに 咲いてはいても
こころつながらる

「勿忘草」

ゆうほ



むかしや上座で
いま便座上
そのうち仏壇

我が棲家

ゆうほ



命果つまで 愛しています

都わすれに そつとふれ

さくら

ちぎりとりたい 残した君を

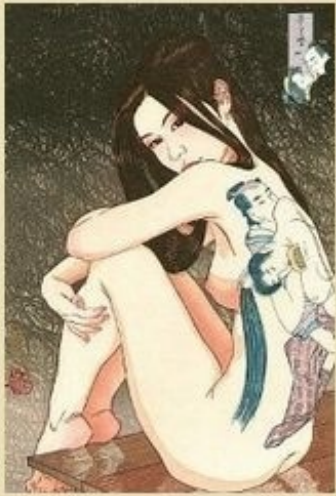
いのち縮もと わが手なか

ゆうほ



ふたり向き合い
阿吽の呼吸
関の中でも
金剛に

ゆうほ



恋の炎に

焼き尽くされて

燃えて落ちるか

紅椿

さくら

八百屋お七の恋の火消せず

悲しその身も

紅蓮の火

ゆうほ



土の下いる

おふくろさんに

詫びて届かぬ

親不孝

ゆうほ



風に吹かれて
飛ぶタンポポに
思い託して
息吹かけ
ゆうほ



届かぬ想いで 濡らした袂

乾かぬうちに 春の雨

月うさ

濡れた袂を 見せたくない

口に含んで つくる笑み

ゆうほ



遠い昔の
恋文みれば
前にいる人
どこの人

ゆうほ



風になびいた
柳の恋は
折れる事ない
春一番

ゆうほ



一目惚れして
嫁ぐのやめた
あの時あった
憎い人

ゆうほ



あなたのしもを

かえるのいやよ

それじゃ遺書など

書きかえよ

ゆうほ



梅も咲いたし 桜も咲くよ

どうしてお前は 咲かないの

さくら

あなたの前で 咲き散りたいと

探まもって 虞美人草

ゆうほ



梅見してるか

ももみてるか

それともよその

はなみるか

ゆうほ



花の下にいる

見目良い女

思わず伸びる

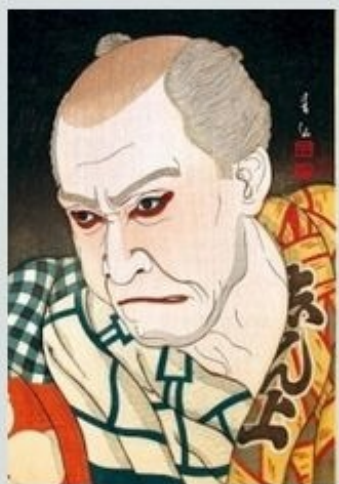
鼻の下

ゆうほ



トイレ掃除の
妻の手みれば
俺の歯
ゴシゴシ
ゴシゴシと

ゆうほ



色は黒いが
これでももてる
もてなきや
子は鴉に
できぬ
ゆうほ



ほのかな想い 実らぬ恋に

未練残した なごり雪

月うさ

雪に描いた 相合傘は

とけてまじわり

流れ行く

ゆうほ



きりぎりすなら

夜なりや泣くが

義理の褥じや

泣けもせぬ

ゆうほ



花弁をむしられ 花芯の蜜を

吸い尽くされて とけてゆく

さくら

とけてあなたの心の中に

ともに笑って ともに泣く

ゆうほ



花の香りに

誘われ蜜を

吸ったあとには

さしてみる

…蜜蜂

ゆうほ



わたしの心の 動きのような

小さくよせた 小紋よせ

さくら

きつく締められ お前の色に

染めて平される 辻が花

ゆうほ



狸じいはいは

大筒見せて

うてば
燧どの
燃えあ
がる

ゆうほ



やっぱりいつもの泥大島は

からだ馴染んだ あなたです

さくら

縦と横糸 ぴたりと合って

絵なる泥染 俺おまえ

ゆうほ



こだわり続けた
男の道が
人の道なら
よかろうに
ゆうほ



いくら想いを 寄せてもだめよ

あのひといつも 水中花

さくら

ならぬ恋路に 道踏み外し

怒り触れたか 水中花

ゆうほ



螢恋すりや

身を焦

がすのに
お前や

きもち
焦がすだけ

ゆうほ



幸せならば
お前とふたり
苦勞するなら
俺ひとり

ゆうほ



夢か幻

妄想なのか

君が出てくりや

覚めないで

ゆうほ



すねて一足
なだめて三足
別れともない
おぼろ月

真恋



きれたお方の

優しい言葉

思い出させる

春の雨

真恋



酔わせてください
今夜は酔うて
存分言いたい
胸の内

真恋



さんざ浮名を
流したあげく
雨降る夜にや
思い出す

真恋



竹に雀は

品よく止まる

サテ止まらぬか

色の道

真恋



咲いた桜に
なぜ駒
つなぐ
駒が勇めば
花が散る

真恋



虹の心を

硝子にこめて

恋火燃やして

とじこめる

ゆうほ



俺とおまえは

消し炭なのか

ちよつと火が

つきや
燃え上がる

ゆうほ



砂の城だと 承知で住んで
わたしの方が ばかでした
さくら

金の城より おいらのボロ屋
手鍋ひとつで 幸せさ

ゆうほ



お前好きだが
どこから攻めよ
きみの心に
スキがない

ゆうほ



指の間を さらさら落ちる

砂を見てると むなしいわ

さくら

砂の一粒 浮世を写す

落ちる間の 泣き笑い

ゆうほ



バナナはおぼる

マレーの美人

上目っかわれ

アラ〜いいいの？

ゆうほ



国を舵取る

話じやなくて

家事は誰とる

痴話喧嘩

ゆうほ



それでは先に 鶯やるよ

桜の頃には きつと行く

さくら

さくら散り終え 景桜なれど

君の爲にと 花ひとつ

ゆうほ



ガラスコップに
入った恋は
君の言葉で
直ぐ割れる
ゆうほ



定年退職

会社に何も

支障ないのが

ちよつと悔し

ゆうほ



猪口に落した お前の涙
今夜は俺が 呑んでやる
さくら

酒に落とした 涙のなかに
うぶな情けが ひとつ落つ
ゆうほ



ぬるま湯からは
あがれぬように
ぬるまい恋から
抜けられぬ

ゆうほ



あいそ笑いで 呑んでる酒は
一杯いくらで 呑む酒よ

さくら

ぬしの荷物にや ならないように

義理でさしだす 猪口震え

ゆうほ



呑んだふりして
しなだれかかり
「泊まる？」と訊くの
待つ私

ゆうほ



あなたの知らない ところで泣くの
亀には亀の 意地がある

さくら

あたしや死んでも べっ甲のこす
ぬしは浮名を のこすだけ

ゆうほ



朝になっても

あたしが好きか

夜に「好きか」

何が好き

ゆうほ



あなたと呑んでる この酒の味
ますます深く なるばかり

さくら

呑めば呑むほど 深みにはまる
酒と情けで 溺れいく

ゆうほ



帰りたくない
言い訳をして
最終電車の
時を待つ

ゆうほ



散歩するのち

三日が限度

何か抜けてく

定年後

ゆうほ



お座敷あがれば

みな殿様よ

呼べばお池で

蛙なく

ゆうほ



今の今まで 信じていたの
見てはいけない ものを見た

さくら

騙したおまえと 信じた私
どちらにも馬鹿じゃ なんとしよ

ゆうほ



待っていたのよ

ひとつの傘で

ふたり重なる

蜜の時

ゆうほ



にぎり酒でも おいときゃ出来る
うわずみ透けて 見えるでしよ

さくら

主に見せたい 綺麗な所
ふつたらあたしや 濁り酒

ゆうほ



花見団子は

ふた串いらぬ

ひとつ分け合う

仲が良い

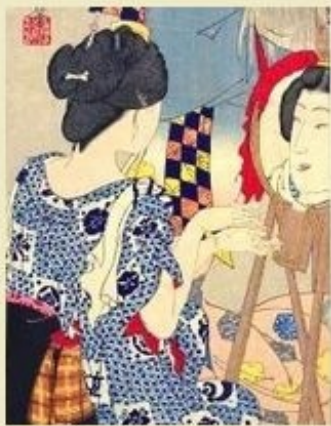
ゆうほ



人間なんて 見た目じゃやないよ
しつかり中身を 見なさいよ
見た目中身も 悪くはないに
なんで今でも ごけの花

さくら

ゆうほ



在職中の
名刺をくれば
出てくる顔は
遠い人

ゆうほ



思う気持ちの 半分さえも

いえないわたしの 身になつて

さくら

惚れたおまえにや

言葉はいらぬ

体あわせりや

清むものを

ゆうほ



今日のおつとめ
デパート行くか

それとも公園
見まわるか

ゆうほ



煙草やめよと
頑張る先の
喫煙室が
目にしみる

ゆうほ



梅のつぼみは
想い出そだて
君にみせよと
かおる花
ゆうほ



しつかり用じた はまぐりだけど

熱い吐息に 口をあく

さくら

なでてみようか つついてみよか

したであたため 口をあく

ゆうほ



桃の節句に ほどよい味で

お吸い物など 召し上がれ

お吸いくださいれ ももみるあいだ

ひめは頬染め またすすめ

さくら
ゆうほ



嘘の涙で
殿方酔わせ
本気にさせる
なきじょうご
ゆうほ



貝は片割れ

ぴたりと合うが

あいにく主では

ないような

ゆうほ



煙草やめよか

やめるのよそか

迷う事さえ

やめようか

ゆうか
ほ



別れ話も たびたび聞けば
年中行事に 聞こえるわ

さくら

別れと決めて 一夜を添い寝
朝になつたら 元のさや

ゆうほ



嘘と誠の
涙が混じる
どこにしかけた
罨がある

ゆうほ



雪さえ照りよで
流れてとける
ぬしの照りよで
心とく

ゆうほ



あなたの心の 半分だけは
私にください にごり酒

さくら

愛の泉は 枯れないものさ
君がいらなきや 枯れるだけ

ゆうほ



しがらみ常識

縛られ生きて

自縄自縛の

浮世かな

ゆうほ



一杯呑んだら お帰りなさい

家で女房 待ってるよ

呑めば怖いし 呑まねば行けぬ

山のカミサマ いびき待つ

さくら

ゆうほ



君を抱きしめ
香りをか

いだ
覚めり

や枕が
添い寝する

ゆうほ



のれんをはらって お店を出れば
空にまあるい 月が出た

さくら

家に着くまで おいらの天下
月さえ道中 提灯さ

ゆうほ



余命数えて
今更何を
花は咲いたら
散るものを

ゆうほ



いいじゃないのよ 光の君よ

喧嘩しても けがないよ

さくら

禿げてボケてりや 喧嘩もできぬ

まるくおさまる 茶碗蓋

ゆうほ



君にかわって
わたしが川へ
流れ雛なり
海へいく

ゆうほ



桃の節句で

孫とあそべば

遠い昔も

一夜夢

ゆうほ



坊主頭を

掻きだしみれば

南無の言葉で

何も無

ゆうほ



やさしすぎたの あなたはいつも
あちこち花を 愛でないで

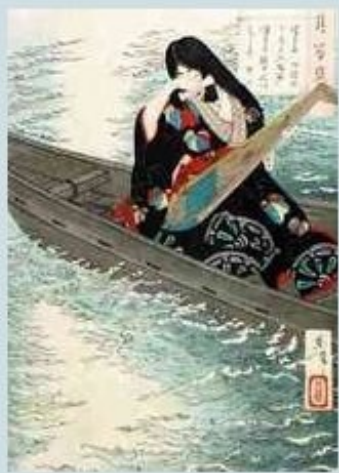
さくら

咲いた花には 罪などないが
愛でるあなたが 憎らしい

ゆうほ



よいの小舟を
ゆられてみれば
こいでいこうか
寝てようか
ゆうほ



人は命の

短さうらむ

かげろう恨む

暇もない

ゆうほ



そつとあなたの 背中に顔を
うずめて泣きたい 夜もある

さくら

夜のしじまに ふたりの影が
言葉いらない 仲なのさ

ゆうほ



幼
すぎたの
あの頃
のわたし
恋が恋とも
知らぬ
まま
まま

ゆうほ



わたしの思いを 危険区域に 入らない
さくら
いこかやめよか じらしてみよか
ここはがまんの 国の中
ゆうほ

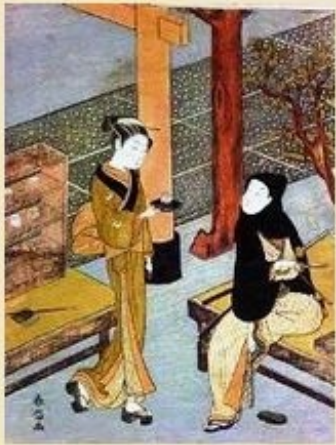


上着も脱がずに お茶だけ飲んで
「また来るからね」と 帰るひと

さくら

あたしや茶腹の 一時なのか
お茶を濁した 憎いひと

ゆうほ



企業戦士と

呼ばれた俺も

家じや捕虜なり

奴隷なる

ゆうほ



この泣き顔を

見られたくない

慌て目薬

さして笑み

ゆうほ



何でも出せる

あの腹

ほしい
姿似てるよ

ドラえもん

ゆうほ



無限でてくる

ポケモンこわい

ポケット金食う

モンスター

ゆうほ



リモコン操作の
鉄人28号

妻にみせなきや
よかつたな

ゆうほ



酔ったアンタの
言う事なんか
本気にやしない

惚れ言葉

月うさ



たまにヤキモチ
焦げないように
軽く焼かされて
食べごろに

月うさ



二人はひとつ
二人でひとつ
二人がひとつ
どれがいい？
月うさ



やつと出会えた 恋なんだもの
花が散るよに 散りはせぬ
花は散ろうと ふたりの恋を
結ぶ実にした とわの花

リーベ

ゆうほ



名残り雪など 寒くはないわ

あなたと飲める 酒あれば

リーベ

炬燵入って かわいい猪口で

とっくりさした 雪見酒

ゆうほ



相合傘を 差すほど 降らぬ

すねて 甘えて 無理にさす

リーベ

傘で間に合う この雨野暮な

もつとぬれるか 茶屋の中

ゆうほ



出しちやならない

おとなの色香

未熟ももから

匂い立つ

ゆうほ



国の行く末 憂いて立つた

あの戦いは 何だった

さくら

夢を追いかけ 走った時も

その夢さえも 夢の夢

ゆうほ



君がたてたの
さざ波ひとつ
いまや津波さ
身も溺れ

ゆうほ



君が霞んで
眩しく見える
春の陽気か

恋霞

ゆうほ



アンパンマンは
うらやましいな
顔のすげかえ
できるもん

ゆうほ



風の神様

舞台をはしる

春一番の

かぶりつき

ゆうほ



変身合体

なんでもありよ

俺も夜だけ

ゴレンジヤー

ゆうほ



ガ子ンコ勝負は
夜するものよ
ふとんの上で
もう一丁

ゆうほ



君は遅咲き
憂いはいらぬ
一輪咲いても

梅は梅
ゆうほ



仕事一筋

過ぎ去りてきたが

風が吹き込む

時もある

ゆうほ



不況リストラ 介護に年金

心配だらけの 世代だよ

さくら

わが身始末は わが身でするか

その腹さえも 出来ぬ俺

ゆうほ



碇あげなきや
船出はできぬ
情け重たく
絡みつく
ゆうほ



星とふんどし

貸し借りなしよ

ひとのものなら

赤っ恥

ゆうほ



惚れていりやこそ
右手をあげる
あげたる

その手が
何故おりぬ

ゆうほ



今頃のこのこ 帰って来るな

だって今日は 啓蟄だ

さくら

春の日差しで 心が踊り

恋のあお虫 目を覚ます

ゆうほ



秘めた嘘から
はじまる恋は

壊したいけど

壊せない

ゆうほ



君は紅梅

俺白梅で

混じり花咲きや

もも一輪

ゆうほ



あなた好みに

髪型変えて

髪に手をやり

しなためす

ゆうほ



剣の免許は
身につくもので
国の免許は
ナフタリン

ゆうほ



惚れたお方の

メールの返事

じらしたいのに

直ぐに書く

ゆうほ



ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part1 完結

<http://p.booklog.jp/book/18432>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part2 完結

<http://p.booklog.jp/book/18285>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part3 完結

<http://p.booklog.jp/book/20624>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part4 完結

<http://p.booklog.jp/book/21269>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸Part5 執筆中

<http://p.booklog.jp/book/22137>

ゆうほ作 ちょっと危ない色艶都々逸 文章編 執筆中

2011年2月14日から

<http://p.booklog.jp/book/17722>

両本とも毎日更新連載中です。

コメント、評価(ログイン時可能)をも書き込みお願い致します。

ゆうほ 3月7日 ペナンの海より

ちょっと危ない色艶都々逸笑って許して！ P a r t 4 短冊本

<http://p.booklog.jp/book/21269>

著者：ゆうほ

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/uoboat/profile>

発行所：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/21269>

ブックログのパブー本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/21269>